The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「他者」を描く：『王道』におけるスチエン族描写に関する考察
Author(s)	井上, 俊博
Citation	Gallia. 2023, 62, p. 91-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91101
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「他者」を描く
――『王道』におけるスチエン族描写に関する考察 ――

井上　俊博

序

アンドレ・マルローは1923年クメール遺跡を盗掘するため現在のカンボジアを訪れたことを契機に、仏領インドシナという植民地を経験している。この植民地、そしてそこへ至る道中でマルローは、中国人やジブチ人といった様々な非西欧人と接触しており、1930年発表の『王道』や1933年発表の『人間の条件』といったアジアを舞台とする彼の小説作品に登場するジブチ人や中国人の描写の背景には、このような彼の経験が存在している[1)]。中でも『王道』はクメール遺跡盗掘という自身の経験が色濃く反映された作品であるが、本作において物語を大きく展開させる存在であるインドシナ半島の少数民族スチエン族に関しては、マルローは接触した経験が無く、探検家達が残した資料を基に彼が作品内において再構築した点において特異である[2)]。

また、マルローは1948年発表の小説『アルテンブルクのくるみの木』の中で登場人物メルベルクに性行為と出生の関係を知らず、生物学的な意味での父子関係が存在しないメラネシアの島々に暮らす「はなはだ教訓的な」原住民の存在について語らせているが、これは文化人類学者マリノウスキーが『未開人の性生活』の中で考察したトロブリアンド諸島の人々を指していると思われる[3)]。このマリノ

1）Curtis Cate, *Malraux*, traduit de l'anglais par Marie-Alyx Revellat, Perrin, 2006, p. 101-102 ; p. 148-149. 『王道』の冒頭ではジブチの売春宿で踊る黒人女性が登場するが、これはマローが1923年インドシナへ向かう船旅の途上で立ち寄ったジブチで踊る裸の現地人女性を目撃した経験が反映されている。また、『人間の条件』には中国人が登場するが、1925年マルローはパートナーであったポール・モナンと *L'Indochine* という新聞を仏領インドシナで発行しており、その際在仏領インドシナの中国国民党から資金援助を受けていた。

2）Walter G. Langlois, «Aux sources de «*La Voie royale*»», dans André Malraux, *Œuvres complètes*, tome I, éd. Pierre Brunel et al., Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1989, p. 1145-1146 ; p. 1156-1162. 『王道』（原題：*La Voie royale*）への参照は上記 *Œuvres complètes*, tome Ⅰ収録の版を使用し、*VR.* と略記し頁数を記す。また、翻訳に関しては以下のものを参照した。アンドレ・マルロー『王道』、渡辺淳訳、講談社、2000.

3）André Malraux, *Les Noyers de l'Altenburg*, in *Œuvres complètes*, tome II, éd. Marius-François Guyard et al., Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 684.　本作の翻訳には以下のものを参照した。アンドレ・マルロー『アルテンブルクのくるみの木』、橋本一明訳、中央公論社、（『世界の文学41　マルロー』）1964.：B・マリノウスキー『未開人の性生活』、泉靖一・蒲生正男・島澄訳、新泉社、1978, p. 17-18；p. 129-132；p. 142-143.　マリノウスキーによれば、トロブリアンドの人々は睾丸の生理的機能について無知であり、精液と生殖の間に関係は無いと考えている。そのため生物学的親子関係は父子の間に存在せず、子供は母親とのみ氏族関係などの繋がりを持つ。子供は成長すると母の兄弟が暮らす場所に帰属し、そこで財産や諸々の権利を有することになる。また『アルテンブルクのくるみの木』ではメラネシアの原住民たちにキリスト教の伝道師達が性行為と出生の関係を説明しても、性行為を行った女性すべてが妊娠するわけではないことを理由にその因果関係を否定されるエピソー

ウスキーへの言及からはマルローの人類学に対する関心が窺えるが、『王道』においてスチエン族を描写するために彼が参照した資料もまた、人類学の一部をなすものであった。そしてこの人類学という科学は、19 世紀後半に文化的・社会的に異質な「他者」を西欧の基準に照らして了解可能なものとするため成立したものであり[4)]、その歩みは西欧諸国による植民地支配拡大と切り離せない関係にあった。

本稿では、人類学の発展経緯を踏まえつつ、マルローが参照した資料と『王道』内におけるスチエン族の描写との関係を考察していく。

1. 人類学と「他者」

先述のように、アジアを舞台としたマルローの小説作品には非西欧人が登場するが、中国を舞台とする小説『人間の条件』では中国人・陳が登場する。

> とがった頬骨、ひしゃげたように低いけれど、くちばしのようにかすかな鼻梁のある鼻、こうした、中国人というよりはむしろ蒙古人に近い彼の容貌は、すこしも変っていなかった。ただ、疲労の色が現れているだけだった[5)]。

この引用部では尖った頬骨と起伏に乏しい鼻筋に加え、「中国人より蒙古人に近い」容貌と陳は描写されているが、ここにマルローが中国人やモンゴル人といったアジアの人間集団に対してステレオタイプなイメージを持っていたことが窺える。このような人間集団に対するイメージは『王道』においても見受けられる。

> かれ［クロード］は、まわりに虫がくっついてできる石油ランプの斑点と、瞳と黒ずんだ皮膚の間の輝くばかりの白眼を除けば、《黒人女》という言葉を思わせるものは何ひとつない、鼻筋の通った娘たちを思い浮かべていた。
>
> （*VR.*, p. 372.）

『王道』に登場するこのジブチの売春宿で踊る黒人女性は、暗い皮膚の色と白眼のコントラストによって黒人女性の典型的イメージを想起させる一方、通った鼻筋がこのイメージに反するものとして描かれている。この黒人女性は先に述べたようにマルローが実際に目にしたジブチの女性をもとに描き出されたものであるが、「その通った鼻筋」を以て黒人らしくないとする彼の見方の背景には、欧州で普及していたアフリカの人々に対する画一的なイメージが存在している。19 世紀

ドが登場するが、マリノウスキーも同様のエピソードを本書の中で紹介している。ただし、マルローはメルベルクがメラネシアの原住民に関する言及を行う懇話討論会を第一次大戦前に行われたものとして描いているが、マリノウスキーがトロブリアンド諸島でのフィールドワークを行ったのは世界大戦開戦後の 1914 年からであるため、時間的なずれが生じている。

4）竹沢尚一郎『表象の植民地帝国』、世界思想社、2001, p. 6.

5）André Malraux, *La Condition humaine*, in *Œuvres complètes*, tome I, *op.cit.*, p. 516.　本作の翻訳に関しては以下のものを参照した。アンドレ・マルロー『人間の条件』、小松清・新庄嘉章訳、新潮社、1971.

後半から20世紀初頭にかけ、世界中の地理やそこに暮らす人々について記したエリゼ・ルクリュは、1885年発行の『新世界地理』の中でこの黒人像について言及している。

> お定まりのてらてらした黒い肌、ぶあつい唇、突き出した顎、扁平な顔面、ぺしゃんこの鼻梁と広い鼻孔、縮れ毛は、アフリカ人全てに天賦のものと想像しがちだが、大多数の黒人はこのイメージからほど遠いものである[6)]。

このルクリュの指摘から、皮膚の色だけでなく分厚い唇や低く横幅のある鼻といった黒人のイメージが19世紀末に普及していたことが窺える。鼻筋の通った顔面の形状を以て黒人らしくないとする先のマルローの描写は、彼自身の中にもこのようなイメージが浸透していたことの裏返しであると言えるであろう。

以上のように、小説作品に登場する人物描写からマルローの中に非西欧の人間集団に対する画一化されたイメージが存在していたことが窺い知れるが、このような人間を皮膚の色や容貌といった身体的特徴により分類することで生まれる人種像形成の背後には、当時発展を遂げつつあった人類学が存在している。

19 世紀中盤、パリやロンドンといった西欧の主要都市で民族学協会や人類学協会が設立されていくが、これらの協会の目的は植民地拡大に伴い西欧に流入したアフリカやアジアといった西欧にとっての「他者」に関する情報を分類・整理することにあった。そしてその際モデルとなったのが、人間を肌の色等の外見的特徴によりヨーロッパ人、アメリカ人（インディオ）、アジア人、アフリカ人、原始人、畸形人の6つに分類するリンネの人種分類であった[7)]。

そして1859年、世界初の人類学会である「パリ人類学会」がフランス人外科医ポール・ブロカにより創立される[8)]。彼が人類学に与えた影響は大きく、医学と人類学を連動させる彼の手法により、それまで曖昧で多義的であった「人種 race」という言葉が厳密に定義されていき、従来の民族学・人類学を「人種の科学 la science des races」へと変貌させていった[9)]。

それでは、ブロカの人類学とはどのような特徴を持っていたのであろうか。ま

6）Élisée Reclus, *Nouvelle Géographie universelle : La Terre et les Hommes, tome X, L'Afrique septentrionale Première partie, Bassin du Nil, Soudan égyptien, Éthiopie, Nubie, Égypte*, Librairie Hachette et Cie, 1885, p. 28.　翻訳に関しては以下を参照した。エリゼ・ルクリュ『ルクリュの19世紀世界地理・第2期セレクション1 北アフリカ第一部―アフリカ総説、ナイル川流域：大湖沼地方、エチオピア、スーダン、エジプト』、柴田匡平訳、古今書院、2019.　なお、ルクリュはこのような典型的黒人像は「本来の「黒人」les nations «nègres» proprement dites」の代表的存在であるアフリカ大湖沼とナイル川西側上流の支流地方に住むフンジ人などのものであると述べている。Élisée Reclus, *Nouvelle Géographie universelle : La Terre et les Hommes, tome X, L'Afrique septentrionale Première partie, Bassin du Nil, Soudan égyptien, Éthiopie, Nubie, Égypte*, *op.cit.*, p. 28.

7）竹沢尚一郎「人種／国民／帝国主義：19世紀フランスにおける人種主義人類学の展開とその批判」『国立民族学博物館研究報告』、No.30-1, 2005, p. 3.

8）平野千果子『人種主義の歴史』、岩波書店、2022, p. 135.

9）アルノ・ナンタ「ポール・ブロカの形質人類学の前提―政治（性）の拒否と変移説の否定」『人文學報』、No.97, 2008, p. 79.

ず、ブロカは前提として白人とその他の人種の間には多大な身体的・知的差異が存在すると考えており、彼はこの差異の原因を人類が複数の起源より生じたためであると考えていた。そのため、彼の人類学は人類の複数起源説に基づくものであった。また彼は、白人種と有色人種間の身体的差異が人種間の知的・文化的差異と関係していると考え、その関係性を実証すべく人体を計測する様々な器具や実験を考案した[10)]。中でも彼が最も注目したのが頭蓋骨の形状と脳の重量である。彼は脳の重量が重いほど知能が優れているという前提のもとこれらの計測を行い、その結果白人種の脳重量は有色人種のそれを上回っており、したがって白人種の方が知能が優れているという結論を導き出した。このような見解は、有色人種などある種の人間には先天的にある種の知的能力が欠落しているという当時の支配的イデオロギーを再現したものでしかなかったが、脳の重量や頭蓋骨の計測というブロカの作業はこのイデオロギーに「科学」の装いを纏わせることになった[11)]。さらに、彼のこのような計測による身体の数値化は、人間を複数の群に分類することだけでなく、人種間の差異と優劣を可視化・絶対化するとともに、各人種を野蛮から文明へと至る発展段階という軸上に序列化することを可能とした[12)]。

また、ブロカの活動は学会内に止まらず、新たに人類学に関する講座や研究機関を設立するなどし、彼とその一派の影響力は社会に広く浸透していった。中でも最も社会に対し影響力を持ったのが 1876 年設立の「パリ人類学学校」である。そこで論じられた人種間の差異と科学的手法により導き出された白人種の優越性というブロカとその一派の教説は、植民地拡大期にあった当時の人々に強く支持されることとなった[13)]。

このように一世を風靡したブロカとその一派であったが、1880 年のブロカの死去以後、複数起源説を前提とする彼の人種論は急速に科学的名声を失っていき、これに代わり単一起源説を支持する社会進化論が形質人類学の内部で主流となっていく。そして 19 世紀も終わりに迫った 1900 年から 1920 年にかけては、世界中の諸社会を進化の軸に沿って並べる進化論人類学や高位の文明から低位の文明への一方的影響を論じる伝播論が主流となっていった。しかし、複数起源説から単一起源説に基づく進化論へ移り変わろうとも、白人種が他の人種より優れているとする前提が変化することはなかった。たとえば、社会進化論は様々な人間集団を未開から文明への発展という単一の物差し上に配列するものであり、その頂点には白人種が最も文明化した存在として君臨していた。そのロジックは異なろうとも、有色人種の劣等性を反照させることで白人種を全人類の頂点に位置付けるという点においては、ブロカ派も進化論人類学も共通していた[14)]。

10）竹沢尚一郎「人種／国民／帝国主義 : 19 世紀フランスにおける人種主義人類学の展開とその批判」、*op.cit.*, p. 11-13.
11）竹沢尚一郎『表象の植民地帝国』、*op.cit.*, p. 78.
12）竹沢尚一郎「人種／国民／帝国主義 : 19 世紀フランスにおける人種主義人類学の展開とその批判」、*op.cit.*, p. 14-15.
13）竹沢尚一郎「フランスの人類学と人類学教育」『国立民族学博物館研究報告』、No.31-1, 2006, p. 60.
14）竹沢尚一郎『表象の植民地帝国』、*op.cit.*, p. 81 ; p. 99-100 ; p. 110-111 ; p. 141-142.

一方、学会外で人類学は植民地支配を正当化する論理として利用され続けた。ブロカ派の複数起源説に基づく白人の人種的優位性という教説は、アフリカなどの植民地において現地人を支配する立場にあった軍人や行政官にとって自らの行為を正当化するものとして受け入れられており、複数起源説にとってかわった適者生存をうたう進化論にしても、イギリスやフランスの植民地支配を正当化するイデオロギーとして機能していった[15)]。具体的には、フランスでは1885年の国会でジュール・フェリーによって「優等人種」である白人種には「劣等人種」を文明化する義務と権利があるという植民地支配に関する考えが表明された。植民地化は万人の自由と平等を説いた人権宣言という共和国のイデオロギーと矛盾するものであったが、この矛盾を調停するものとして「文明化の使命」という考えが生み出され、その合理化のために人類学は利用された。また、フランスによる「文明化」とは植民地の人間の言語や生活習慣を放棄させ、フランスが代表するヨーロッパ文明に彼らを「同化」させることを意味していた。他方、支配の対象とされた人々に関しては、探検記や小説などを通じ彼らの人食いの慣習や奴隷制、産業の未発達などその「野蛮さ」が喧伝されていき、彼らに文明を与えることは「高貴な」行為であると受けとめられていた[16)]。

以上のように、ブロカの人種主義的人類学やその後の進化論人類学は植民地支配のために転用され、白人種による支配に有用な「科学」として機能することとなった。また、この「科学」は「劣等人種」というレッテルが貼られた「他者」像を生み出した。そしてその根拠とされた肌の色や容貌といった身体的特徴に関する描写は、それに対する自覚があろうとあるまいと、人種的偏見と描写される者を支配の対象として見るという暴力性を常に伴うものだったのである。

そしてマルローが経験した仏領インドシナもまた、このような人類学という「科学」により裏打ちされた支配が実行される植民地であり、彼が『王道』におけるスチエン族再構築の際に依拠した資料は、このような人類学的・社会的潮流の中で生み出されたものであった。

2.『王道』とスチエン族に関する資料：ムオとメートル

それでは、具体的にマルローはどのような資料から情報を得てスチエン族の姿を再構築したのであろうか。まず『王道』におけるスチエン族の描写に注目してみよう。作中スチエン族は弩や伐採刀、そして槍といった道具を使用する描写がなされている（*VR.*, p. 443-444 ; p. 451 ; p. 459.）。また、米製の酒を甕からストローを使って飲む風習や（*VR.*, p. 452-453.）、相手の行動範囲を制限するために逆茂木を使用する描写がなされている（*VR.*, p. 443.）。これらスチエン族が使用する弩や逆茂木といった道具や米の酒の風習は、1858年から1860年にかけシャムやカン

15）*Ibid.*, p. 81; p. 100.　なお、ブロカは人種的起源の相違はある人種による他の人種に対する支配を肯定する根拠とはならないという考えを持っており、1870年代中頃人間による人間の支配を批判する論文を何本も執筆し、植民地主義や奴隷制度などを糾弾した。アルノ・ナンタ、*op.cit.*, p. 88.

16）竹沢尚一郎『表象の植民地帝国』、*op.cit.*, p. 64-69.

ボジアなどを旅し、その際メコン川左岸のブレルムで3ヶ月間スチエン族の集落に滞在し彼らについて書き記した探検家アンリ・ムオの著書にその記述が見受けられる[17]。また、作中スチエン族は「ケ・ディエン族 Ke-diengs」という別称を持つことが登場人物ペルカンにより語られている（*VR.*, p. 438.）。このスチエン族の別称は1905年から1911年にかけてダクラク高原を中心に、そこに暮らす少数民族に関する民族学的調査を行った探検家アンリ・メートルの著書の中にその記述が見受けられるものであり[18]、彼もまた逆茂木や槍・短刀といった少数民族が使用する道具についての記述を残している[19]。『王道』における描写と照らし合わせると、マルローはこれらムオやメートルの著書から情報を汲み取り、スチエン族の姿を再構築したものと考えられる。

しかし、マルローがこれらの資料から読み取ったのはスチエン族の道具や風習といった情報だけだったのだろうか。ここからは、ムオらがスチエン族を始めとするインドシナ半島の少数民族に対しどのような視点で観察を行っていたのか考察してみよう。まず、ムオはスチエン族の身体的特徴を以下のように描写している。

> スチエン族の目鼻立ちはアンナン人やカムボジァ人とはまるで違う。[...]体軀は高い方である。逞しいという感じはしないが、よく均斉がとれていて強健という印象を受ける。目鼻立ちは大体整っている。眉は濃く、髯は生えるが極めて薄い。頬の毛を抜かずに蓄えているものは、重々しくいくぶん陰鬱な表情に見える。
>
> 額は大体に秀でていて知能的であることを示している。事実カムボジァ人より知能は優れている[20]。

ムオはスチエン族がカンボジアの平地に暮らすクメール人などとは異なる身体的特徴を持つことを指摘し、彼らが整った目鼻立ちと均斉がとれた体形をしていると述べている。さらに、彼はスチエン族の額形状から彼らが知能的であると述べている。額が秀でている、すなわち前頭葉部分の頭蓋が発達しているという形状と知的能力を関連付けるこうした見方は、頭蓋骨の形状と知能等の精神能力を関連付けるガルの骨相学や[21]、先述のブロカによる頭蓋骨と脳重量計測による分類

17）Henri Mouhot, *Voyage dans les Royaumes de Siam, de Cambodge, de Laos et autres parties centrales de l'Indochine 1858-1861*, Arléa, 2010, p. 152 ; p. 154-155 ; p. 157 ; p. 159.　本書の翻訳に関しては以下を参照した。アンリ・ムオ『インドシナ王国遍歴記　アンコール・ワット発見』、大岩誠訳、中央公論新社、2002.

18）Henri Maître, *Les Jungles Moï*, Emile Larose, 1912, p. 6-7 ; p. 407.　以下本書に関しては *JM.* と略記する。本書の翻訳は執筆者によるものである。本書の中でメートルは「Se-Dieng」というスチエン族の別称も紹介するとともに、彼らを「強力で好戦的」集団であると述べている。*Ibid.*, p. 407.

19）Henri Maître, *Les Régions Moï du Sud Indo-Chine, le Plateau du Darlac*, Librairie Plon, 1909, p. 114-119.　以下本書に関しては *RM.* と略記する。本書の翻訳は執筆者によるものである。

20）Henri Mouhot, *op.cit.*, p. 152.　なお、ムオはスチエン族を知能的であると述べているが、別の箇所では「記憶力は貧弱で、また計算力も劣っている」と評している。*Ibid.*, p. 156.

21）萬年甫・岩田誠編訳『神経学の源流3ブロカ』、東京大学出版会、1992, p. 52-53.

を想起させるものである。

一方、メートルはスチエン族だけでなくダクラク高原とその周辺に多数存在する「モイ」と呼ばれる少数民族について記しているが[22]、彼はこの少数民族を3つのグループに大別している。

> ダクラク高原には3つの大きなモイのグループが暮らしている。高原の東部、南部、南東部の山々と西部の丘々には未開人［les sauvages］のプノンあるいはムノン族という集団が住んでおり、高原自体はより文明化され、より知的なラデ族の大グループによって占められている。［...］山岳地帯の民族［La race montagneuse］であるムノン族はコーチシナ、そしてカンボジアからアンナンに渡って存在しており、ほとんど知られていない多くの部族に分岐している。その中で最も重要なのはドンナイ川中流域に暮らすスチエン族、ダクラク高原南西部のピエ族とブヌール族、ダクラク高原南部と南東部に暮らすガール族とシルあるいはキルと呼ばれる人々、タクラク湖沿岸のルラム族である[23]。

3つのグループの内、スチエン族は山岳地帯に暮らすムノン族の一派に分類されているが、これとは異なるラデ族のグループを「より文明化され、より知的」と評する一方でムノン族を「未開人」と表現するメートルの説明からは、彼がこれら「モイ」と呼ばれる少数民族集団に対し「文明」という指標に基づく序列化を行っていたことが見て取れる。さらに彼は別の箇所で、この「文明化」の度合いを身体的特徴や知能と関連付けて解説している。

> 民族学的観点から見ても、これら多岐に渡る集団間の差異は非常に顕著である。ジャライ族、ラデ族、ピー族は通常細身で、身長は1メートル70センチくらいに達することもあるが、多くの場合細面で、開放的で知的な顔をしている。［...］一方、ムノン族はこれらの集団より体が小さく、彼ら［ラデ族やジャライ族ら］の知的レベルは周囲の集団よりはるかに優れている。これらムノン諸族は、毛はもじゃもじゃで不潔で、数を数えることもほとんどできぬ者がしばしば存在し、彼らの山々の狭い範囲内で生活し、煙たく不健康で惨めな掘っ立て小屋に暮らす。その社会的段階はラデ族やジャライ族と比べ明らかに劣っている。というのも、文明の基礎が生まれつき備わっているラデ族やジャライ族は、ある程度は彼らの原始的生活環境を改善することが

22）*RM.*, p. 29.　メートルによるとこの「モイ Moï」という言葉は「蛮」という漢字のベトナム語読みであり、アンナン人がアンナン高地に暮らす未開人に対して使用した総称である。またこの「モイ」と呼ばれる人々はラオスではベトナム語の「モイ」と同様の意味を持つ「カー Khas」という総称で呼ばれる。『王道』内でもスチエン族などの少数民族に対してこの「モイ」という表現が使用されているが、「モイ」という名の部族が存在するわけではないことに注意が必要である。

23）*Ibid.*, p. 51.

出来たからである[24)]。

メートルは先の引用部でラデ族を「文明化」され「知的」と表現していたが、この引用部ではラデ族やジャライ族などと比較し、ムノン族は彼らより体が小さく知能が劣っていると述べている。また、ここではラデ族やジャライ族に関して「文明の基礎が生まれつき備わっている」と述べており、あたかも人間集団間で先天的な知的能力の違いが存在するかのような説明がなされている。

また彼は、1912 年に行ったパリ人類学会の講演でも同様の見解を述べている。

> 第 1 のグループに属すラデ族やジャライ族のような集団の人々は背が高く、その体はたくましく均斉がとれており、明るい色の肌をしています。[...] しかし、山岳地帯に暮らす集団の所へ分け入っていくと打って変わったようにこのタイプとは異なる人々に遭遇することとなります。これらの人々は、先ほど挙げたラデ族やジャライ族などと比較するとはるかに暗いチョコレート色をした肌をしており、その頭髪はぼさぼさで時には縮れてすらいて、体毛も濃く背は低い。この民族［la race］はより未開［plus sauvage］で、その生活もまたより過酷なものです[25)]。

この引用部にある「山岳地帯に暮らす集団」とは先述のムノン族らを指しているが、「より未開」な民族であるムノン族は暗い色の肌をしており、ラデ族やジャライ族は明るい色の肌を持つと述べられている。「文明化」の度合いと肌の色という身体的特徴を同時に語るメートルの説明からは、人間集団間には身体的・知的能力の差異が存在するという見解を彼が持っていたことが読み取れる。このような「原始的」段階に留まっている「未開」な集団と、より「文明」的な段階に至った集団との対比というメートルによる「モイ」の序列化は、未開から文明へという発展軸に沿った進化論的分類方法であると同時に、身体的特徴と知能を関連付け人間集団を評価する人種差別的なものであったと言えるだろう。

以上のように、19 世紀中盤のムオや 20 世紀初頭のメートルの「モイ」に対する視点には、骨相学や形質人類学、進化論や人種主義といった当時の人類学的潮流、そしてそこから形成された世俗的イメージが色濃く反映されている。

また、メートルの探検は、植民地カンボジアを管轄統治するカンボジア理事長官から同地域を地理的かつ民族学的に調査するという命令を受けてのもの、すなわちインドシナ半島内陸部への植民地支配の浸透と拡大を目的とするものであった[26)]。彼は自らの探検がもたらす情報とその先にある植民地支配拡大が「モイ」達

24）*Ibid.*, p. 52.

25）Henri Maître, « Conférence Broca. Les Populations de l'Indo-Chine », *Bulletins et Mémoires de la Société d'anthropologie de Paris*, VIe Série, tome 3 fascicule 1-2, 1912, p. 109.　本講演録の翻訳は執筆者によるものである。

26）*JM.*, p. 7.　植民地カンボジアの統治機構に関しては以下を参照。薄さやか「カンボジア植民地期史料再考―理事長官文書を中心に―」『国文学研究資料館紀要』、No.10, 2014, p. 66-70.

にもたらす未来への予感を以下のように語っている。

> まもなく、これら諸民族の中でも最も奥深くに潜む人々も我々の統治に服従し、我々の支配によって統制されていくでしょう。そして彼らは今もなお保持している彼らのかくも独特な特性をすぐに失っていくことでしょう。アメリカのレッドスキン達のように、モイは優等人種たち［les races supérieures］を前にして撃退され、彼らを再生させることなど期待できないあまりにも優越的な文明により一掃され、消滅していくことでしょう[27]。

この引用部からは、フランスによる支配拡大により「モイ」の独自性が失われていくであろうことに対してメートルがある種の憐憫の情を抱いていたことが読み取れる。一方、1909年の著書の最後でメートルは「モイ」達が暮らす地域を「我々の文明が未だほとんど届かぬ民族が暮らす」地と表現しており[28]、1912年の著書はスチエン族やセダン族などが抵抗を続ける地域が残っているものの、インドシナ総督アルベール・サローの指揮のもと、遠からずこれらの地域もフランスに服従することになるであろうという見解で締めくくられている[29]。このように、彼の中でフランスによる「モイ」に対する支配の拡大は避けられぬ帰結として考えられており、ネイティブアメリカンに対する支配を例に挙げる先の引用部における発言には、優等人種とその優越的文明の前に劣等人種は支配され、消滅していく結末が歴史的必然であるという人種主義的バイアスがかかった彼の考えが読み取れる。

『王道』では「モイ」と連合しフランスやシャムから独立した勢力を築こうとするペルカンの計画に対し「未帰順地域が「文明」に抗して生きることなど、ほとんどできない相談だった」（*VR.*, p. 413.）という記述があるが、「文明」により支配され消滅していく「未開」というマルローの少数民族の未来に対する予測は、このようなメートルの見解を引き継いだものであると言える。

3. スチエン族という「他者」像

以上のように、ムオやメートルによるスチエン族を始めとした少数民族「モイ」に関する資料は、当時の人類学的潮流や人種主義、進化論の影響が色濃くみられるものであった。また、メートルの著書に見られたムノン族の未開性を強調する見方は、『王道』内におけるスチエン族の描写にも引き継がれている。

> その半ば未開の未帰順地帯は、密林と同じように怪しげで脅迫的だった。［...］ラオスやカンボジア低地のあの逸楽的なもの憂さはもはや全然なくて、あるのは肉の臭いをともなった野蛮さ［la sauvagerie］だった。［...］

27）Henri Maître, « Conférence Broca. Les Populations de l'Indo-Chine », *op.cit.*, p. 114-115.
28）*RM.*, p. 331.
29）*JM.*, p. 558.

かれら［クロードとペルケン］はまた、大地すれすれに足を引きずるようにして、案内人［スチエン族］の黄色い斑点のうしろから歩き出した。クロードにはもはやその案内人の血のついた、きたない腰巻しか見えなかった。それは完全に動物でも、完全に人間でもなかった。（*VR.*, p. 443-444.）

本作におけるスチエン族は、その登場当初から「野蛮さ」を伴う存在として表現されており、「密林の獣同然 ainsi que les bêtes de la forêt」（*VR.*, p. 471.）や「猿のようにとても長い腕をした長老達」（*VR.*, p. 473.）といったように、彼らが半ば野獣であるかのような描写が繰り返される。このように「不潔」な「未開人」というメートルがムノン族を描写した表現をマルローは繰り返しているわけだが、スチエン族の容貌そのものに関しては族長の「宦官のような顔 sa tête d'eunuque」（*VR.*, p. 451-452.）という漠然とした記述が見受けられる程度に止まっている。

先述のように、マルローは弩や逆茂木、そして米の酒の風習などといったムオの著書に見られたスチエン族の生活様式に関する情報を『王道』内に反映させていたが、そこには整った目鼻立ちに秀でた額といったスチエン族の容貌に関する描写が存在していた。さらに、ムオの著書にはこのような文字情報だけではなく、彼の証言に基づくスチエン族のデッサンという視覚的資料が挿入されている[30]。

このような文字情報とデッサンという視覚資料によるインドシナ少数民族描写は 1883 年に出版されたエリゼ・ルクリュの『新世界地理』の中にも見受けられる。そこでは「アンナン人よりも濃いがヒンドゥーほど黒くはない褐色の肌」や「モンゴル人ほど平たくはない」丸顔、水平な目、頑丈で張り出した顎という少数民族に「共通の特徴」が紹介されており[31]、さらにここにも Gsell なる人物が撮影した写真を基にした「モイの典型」とされるデッサンが挿入されている[32]。このルクリュの記述とデッサンからは、19 世紀後半には典型的な「モイ」のイメージが既に形成されていたことが窺い知れる。

以上のように、スチエン族に関する記述や視覚的資料、そして典型的「モイ」像といったステレオタイプなイメージを踏襲すれば、スチエン族の容貌を描き出すことは容易であったはずである。それにもかかわらず、スチエン族の生活様式に関する情報を抽出し再現する一方でその容貌に関しては漠然としたものに止めたスチエン族の描写には、マルローによる情報の取捨選択と、それを行った意図が存在していると思われる。

また、作中スチエン族は彼らの下を訪れたクロードとペルカンを生け捕りにしようと包囲するが、その際スチエン族は眼差しだけの、あたかも実体が存在しない影のような描写へと変化する。

30）Henri Mouhot, *op.cit.*, p. 138 ; p. 146.

31）Élisée Reclus, *Nouvelle Géographie universelle : La Terre et les Hommes, tome VIII, L'Inde et L'Indo-Chine*, Librairie Hachette et Cie, 1883, p. 863-864.　翻訳に関しては以下を参照した。エリゼ・ルクリュ『ルクリュの 19 世紀世界地理・第 1 期セレクション 4　インドおよびインドシナ』、柴田匡平訳、古今書院、2017.

32）Élisée Reclus, *Nouvelle Géographie universelle : La Terre et les Hommes, tome VIII, L'Inde et L'Indo-Chine*, *op.cit.*, gravure LXXVII.

待ち伏せる野獣の頭のように、かれらの頭は眼ざしだけになって生き、眼ざしは罠の中心に注がれるように小屋に注がれていた。（*VR.*, p. 463.）

上江洲律子は本作におけるスチエン族について、彼らは密林というクロードらにとって未知の世界が彼らに向ける敵意が視覚化されたものであり、クロードらに対する脅威が高まるにつれスチエン族は可視性を失い、見えない脅威である死と同等の存在に変化する、つまり、彼らはクロードとペルカンを結ぶ死の強迫観念が生んだ可視の「死の影」にほかならないと指摘している[33)]。

この上江洲の指摘にあるように、作中スチエン族は一方的に主人公達を見つめ追い詰める不可視な脅威として描かれているが、その一方で本作にはもう一つの不可視な脅威が描き出されている。

蝉でいっぱいの夜のなかに姿をかくして［Invisible dans la nuit pleine de cigales］軍隊がおり、軍隊のうしろにはシャム政府がいた……［...］その国家が暗がりの奥にいて、他の部族に先立って、まず動物のような部族を眼の前に狩りだし、一キロまた一キロと鉄道線路をのばし、一年また一年とつねにすこしずつ遠くに、自分のかかえる冒険家たちの屍を埋めていたのだ。（*VR.*, p. 489.）

作中では、スチエン族によりペルカンが負傷させられたことを口実に、シャム政府がスチエン族とその居住地域の掃討に乗り出す。その際シャム政府は、スチエン族にとって一方的に彼らを見つめる不可視な脅威として描き出されている。このシャム政府がスチエン族に差し向けた軍隊は近代兵器を携え「文明」化された存在として描かれているが[34)]、先述の「未帰順地域が「文明」に抗して生きることなど、ほとんどできない相談だった」という予測通り、「未開人」であるスチエン族は「文明」の力によって駆逐されていく。そしてその過程で、「野獣」のようであったスチエン族の描写は「家畜」のようなものへと変化していく。

まるでモイ族たちの大逃走、葉の茂みの下を移動するかれらの家畜のような泡立ち［leur moutonnement de bétail］の中心は、白人たちが空に投げかけるその光の三角形のなかにあるとでもいうみたいだった。（*VR.*, p. 489.）

シャム政府による侵攻が引き起こした「野獣」から「家畜 bétail」へのこの変化は、「野蛮」の家畜化という「文明」による支配を象徴していると言えるだろう。

そしてこの「文明」がもたらした破滅の中で、それまで漠然としか描かれてこ

33）上江洲律子「マルロー『王道』における＜昆虫＞・＜モイ族＞・＜細菌性毒素＞の役割 ：「戦いの場」の構築手法」『関西フランス語フランス文学』No.4, 1998, p. 68-70.

34）シャム政府と「文明」の関係については以下の拙論を参照されたい。井上俊博「近代兵器と道」『フランス語フランス文学研究』、No.111, 2017, p. 178-183：井上俊博「マルロー『王道』における共同体と地図」『フランス語フランス文学研究』、No.113, 2018, p. 388-392.

なかったスチエン族は、瀕死のペルカンの前にその容貌を明らかにする。しかしそれは、頭蓋骨という姿である。

> そして右手の川のすぐ近くには、死者を悼む泣き女をかたどる、文明人にはわからない苦しみ［une douleur inconnue aux civilisés］をあらわす物神のひとつがしつこく眼にとまったが、その上には周囲に小さな羽がついた人間の頭蓋がのっていた。（*VR.*, p. 497-498.）

作中野蛮な未開人という側面ばかりが強調されてきたスチエン族だが、シャム政府がもたらした破滅を前にした時、彼らの精神性が「死者を悼む物神」という形で姿を現す。しかしこの精神性は、「文明人」にとって理解不能なものである。

ここで、メートルの探検がそうであったように、スチエン族という「未開人」に関する情報が植民地支配拡大のため収集されたものであったことを思い出そう。自らを「文明人」と自負する支配者にとって、スチエン族が掲げる物神が死者の追悼を目的とするものであると理解できても、それは他の生活様式と同様、支配対象である「劣等人種」に関する情報の一部にすぎない。つまり、物神が何を意味するかが「わからない inconnu」のではなく、それを自らと同等な人間存在の精神的営為とみなし理解する視点が「文明人」には存在していないのである。

そしてそのような「文明人」の目には、この物神にのった頭蓋骨もまた死者の追悼対象とは異なる価値を持つものとして映るだろう。それはブロカがそうであったように、自らの人種的優位性を証明する目的で行われた計測という「科学」の対象であると同時に、劣った「他者」像を生み出す源泉としての価値である。

このように、シャム政府とスチエン族の関係は、「文明」による「野蛮」の支配、そして支配対象である「劣等人種」に対する西欧の視点とその支配に利用された人類学という「科学」の存在をあぶりだすものである。そして不可視な脅威であるシャム政府がスチエン族へ向ける眼差しは、支配対象に関する情報を収集・分類し、データベース化していくこのような「科学」の対象という、「文明人」が他者へ向けた一方的視線を象徴するものであると言える。

以上のように、本作においてマルローは「文明化の使命」というイデオロギーの下植民地支配拡大を行った西欧の姿を「文明」化したシャム政府を通じて象徴的に描き出す一方、スチエン族に「文明」による支配の対象としての「未開」という象徴的役割を担わせている。つまり、本作におけるスチエン族の姿は「文明」が生み出した「他者」像であると言える。

マルローは探検家たちが残した資料からスチエン族の生活様式という情報を読み取り、これを「野蛮」というイメージを織り交ぜながら再現していたが、それは彼らを「劣等人種」と見做す「文明人」の視点を再現するためであったと思われる。そして彼がスチエン族の容貌を漠然とした描写に止めたことには、支配の対象としての「未開」というレッテルを貼られたこの「他者」像が、現実に存在する他者そのものの姿ではなく、「文明」が生み出し、「文明人」の中だけに存在

する影のような幻想に過ぎないという批判が存在していたと考えられる。

結論

ここまで見てきたように、マルローが『王道』においてスチエン族を描写する際依拠した探検家たちによる資料は、彼らが生きた時代の人類学的潮流や植民地支配拡大という時代的背景の影響を強く受けたものであった。マルローはこのような性質の資料からスチエン族に関する情報を汲み取り、『王道』内にその姿を再構築した。しかしそれは、探検家たちの目を通じて捉えられたスチエン族の姿の再現ではない。マルローが『王道』において再構築したのは、探検家たちの視線の背後に存在した「文明化の使命」という植民地支配のイデオロギーや、それを正当化するために転用された人類学という「科学」が生み出した「未開人」の姿、すなわち、彼らに内在していた「他者」のイメージである。

マルローは探検家たちの資料からスチエン族の生活様式や風習といった情報を再現する一方で、その容貌に関しては漠然としたものに止めていた。このようなマルローのアンバランスなスチエン族の描写は、探検家たちに内在していたこの「他者」像が、現実に存在する他者の姿ではなく、「文明」から生じた影、すなわち「劣等人種」に対する支配権を有する「文明人」と自らを定義した西欧が生み出した幻想にしか過ぎないという、マルローの「文明」やそれに依拠する西欧の支配者意識に対する批判的姿勢の表れであったと考えられる。

（京都産業大学助教）